

民族の境界を生きる－“父”との会話から

内藤 直樹

私は1999年の8月から11月までアフリカでは初めてのフィールドワークとしてケニア北部マルサビット県の乾燥域に生きる牧畜民アリアル・レンディーレの調査に入った。

アリアル・レンディーレは全レンディーレの約40%を構成する。彼らは、南隣の牧畜民サンプルとの混成集団である点が通常のレンディーレとは異なる。たとえば言語に関してはサンプル語とレンディーレ語のバイリンガルが多い。この二つの言葉は言語学的にはそれぞれナイロート系とクシ系と、まったく異なる系統に属している。

二つの民族の混成集団であるアリアル・レンディーレの文化には典型的な形はないと、彼らに関する人類学的研究を行っているフラトケンに述べている。彼の著書 *Surviving Drought and Development* に登場するアリアルルの老人はこう語っていた。「もしナイロビでお前は誰かと尋ねられたら、私はサンプルと答えるだろう。しかしマラル（サンプル県の中心）では私は“半分レンディーレ”と呼ばれるだろうし、コル（レンディーレの中心）ではアリアルと呼ばれるだろう。」

このような二つの民族の境界を、彼らは実際どのように生きているのだろうか。それが私にとって一番興味がある点だった。今回の短い調査期間では、彼らの生き方を理解したとはとても言えないが、私にとって一番身近な存在だった“父”との会話のなからそのわずかな理解の一部を紹介したい。

私が主に調査を行ったマソラ集落はマルサビット県とサンプル県のはば境界に位置し、あたりの山々の中でもひとときわその威容を誇るバイオ山の麓にある。集落には54軒の家が環状に並んでおり、中心にはナボという神聖な空間がある。

家の構造をみると、背高のほっぺで入り口が皮で覆われているレンディーレのようなタイプはわずかに3軒と少なく、細い枝を組んで作ったカマボコ型のサンプルのようなタイプの家がほとんどであった。ただ、家の壁はサンプルのように土と牛糞をまぜて



私と“父”のサマナ氏と通訳のララチ。寒気で干上がったミルギス川にて。

塗るのではなく、ヤギやヒツジの皮と植物の繊維で編んだ筵で覆われている。屋内はレンディーレのように性別によって利用空間が半々に分けられているわけではなく、サンプルのように台所だけが女性の空間になっており、彼女たちはそこで寝起きしていた。私はこの集落の一軒の家の居候となった。家長と妻とその子供に加え、私と通訳のララチの5人が寝食を共にしていた。狭いながらも楽しい我が家だ。

居候していた家はサマナ家といい、家長は今年73歳になるセベルワ氏。彼がこの地での私にとっての“父”である。隣には弟のインジャラ氏の家がある。セベルワ氏は、その長い人生の中で3度結婚している。1番目の妻とは相性が合わず、わずか数日で離婚したそうだ。2年前になくなった2番目の妻との間には6人の子供が生まれ、その子供たちは皆成人し、婚出したり、家畜キャンプにいたり、学校に行っていたりしており、今は集落にはいない。妻に先立たれたために2年前に結婚した新妻との間に早くも女の子をつくる元気な人だ。私は彼をレンディーレの習慣に従い、年長者に対する尊敬を込めてアッパ（父）と呼んでいた。アリアルでは日常的にはサンプル語が使われている。女性や年少者ほどその傾向は強

い。しかし年長者、特に男性の多くはレンディーレ語とサンプル語のバイリンガルである。彼らの言葉を習得するにあたってサンプル語から覚えるか、あるいはレンディーレ語から覚えるかは大きな問題である。私の場合には、“父”がレンディーレのデュブサイ氏族出身で、レンディーレに強くアイデンティファイしている人だったため、半ば強制的にレンディーレ語を最初にやることになった。また、私にバエウア（バイオ山の子）というレンディーレ名を与えてくれ、同時に守らなければならない習慣や彼の過ごしてきた人生など様々なことを教えてくれた。

アリアルとは何か？これが最初、“父”にしつこく聞いた質問だ。我ながら阿呆な質問だと思う。民族の境界といっても、当の本人たちがどのようにその境界を生活しているのか、さっぱりその感じがわからなかったためだ。そのほかにもいろいろな角度から質問をしたが、この点に関してよくわからない日々が続いていた。しかし、ある日、ふとしたきっかけから、それが何となくわかったと感じられた事件があった。

私は“父”と通訳のララチと共にマルサビット県内を広くたずね歩く旅をしていた。その途中でデュブサイ氏族の集落が集中しているカルギの町に立ち寄った。ここには彼の知り合いや親戚がたくさんいるからだ。たしかにどこに行っても大歓迎。一度に2軒をハシゴして晩飯を2回食べたこともあった。このときに私は最低限のレンディーレ語を話し始めており、ララチも自己紹介程度なら私に直接に話させるようになってきた頃だった。

「アタガイア？（おまえの姓は？）」と聞かれたら、「アコサマナ！（サマナだ！）」と答え、

「アタコーボ？（おまえの氏族は？）」と聞かれたら、「デュブサイ！（デュブサイだ！）」と答えろと教えられており、その通りに答えるとみんなが喜ぶので、なるほど自己紹介はできるようになったなど



思っていた。

ところが自分たちの集落に帰ったあと、例の自己紹介を教えられたようにくり返していると、“父”が渋い顔をして私に言った。「カルギではデュブサイと言えばいいが、コルやここではマソラと言いなさい」。マソラというのはサンプルの氏族名である。「何故か」という私の問いに“父”は「私の骨はデュブサイだが、肉はマソラだからだ」と答えた。彼は生まれはデュブサイ氏族だが長い人生の旅路の末に、ここマソラ氏族の集落に住むことにした。「だから私が生まれ育ったカルギではデュブサイでいいが、ここではマソラと名乗らなければならない」と言った。「まったく調子のいいオッサンだ！」と私は可笑しくなってしまった。“父”の人生は移動の連続だった。まだよちよち歩きのところから、家畜とともに広大な範囲を移動してきた。マルサビット県ではマルサビット山やトゥルカナ湖はもちろんのこと、マルギス川をとおるぬけ、南はサンプル県までもがその範囲だった。また、青年時代に一度、はるばるマララルまで“親戚”のチーフに家畜をもらいに出かけていったこともあった。

「デュブサイはレンディーレで一番大きい氏族だ。そしてマソラもアリアルで一番大きい氏族だ」だから「私たちにはどこに行っても親戚がいる。どこに行っても大丈夫だ！」と“父”は力説していた。実際、父と私と通訳との旅の時も私たちは毎日、宿と飯にありつくことができた。本当にどこにいても“親戚”がいるのだ。

私は今のところ“父”の生き方しか知らない。だからこの事例がアリアル全体を代表するのかわからない。サンプルかレンディーレか。こうした民族や氏族といったラベルには、生きている個人の属性を規定してしまうところがある。しかし、“父”はそれらのラベルをその場その場で都合よく張り替え、自らの属性をいかようにも変更しながら生きてきた。民族の境界などあたかも存在しないかのように長い旅の人生を過ごしてきた“父”。彼の生き方を見ていると、こうした一見「調子のいい」やりかたも、ふたつの民族の境界で、家畜とともに広大な範囲を移動する、長い旅の人生をおくる人々が生きぬいていくための技のひとつなのかもしれないと感じた。

（ないとう なおき 京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科）

集落の家。細い枝を格子状に編むようにして作られている。